

文殊仙寺六郷山峯入り史料

加藤 泰 信

近世における六郷満山峯入りは、寺院・諸堂に残されている「柱銘・修札」等により、九回行なわれたことが確認されている。すなわち、元禄十四年・宝永三年・寛延三年・宝暦九年・安永八年・寛政十一年・文化十四年・天保八年・嘉永六年の二月に、兩子寺を越家として実施された。ただし、文献史料に乏しく、「柱銘・修札」を除けば、豊後高田市の田染組河野庄屋に残る「水鏡」を代表として、地域的なものは、武蔵町の「塩屋年中行司」・安岐町「桂徳寺文書」（旧矢野庄屋文書）等の中に部分的に記されているくらいである。特に、峯入りに関係した寺院には、文書が残存していないのが特徴である。わずかに、「報恩寺文書」（武蔵町麻田・現在文書不明・「武蔵町史」所収）と「山内年中行事記」（国東町文殊仙寺）が紹介されているに過ぎない。これらについては、「大分県文化財調査報告第五十四輯・峯入りの道―歴史の道調査報告書―」を御参照願いたい。満山寺院の中心であった兩子寺が、明治二年、火災にあっていることや無住の期間を経験した寺院が多いことも関係していると考えられる。

今春、文殊仙寺庫裡の二階から発見された文化十四年の「六郷山入峯扣」は、数少ない寺院側の史料として貴重なものである。同時に見出された日記類五冊のうち、嘉永三年のものに、わずかではあるが入峯の件が記載されている。また、これまで保管されていた「當寺由緒明細録」にも関連記事があるので、あわせて掲載した。

「入峯扣」では、文化十四年二月廿三日早朝、岩戸寺村小獄境目より文殊に入り、各所で動行し、朝食をとったことが知られる。本堂（文殊堂）柱銘は、嘉永六年のもので、二月廿三日となっているので、年代は異なるが日付けは全く同じにある。

さらに難所で行を勤め、成仏境へ進んでいる。これまで、到着を知らせる法螺吹きは、行者が行なったことになっていたが、これによれば、山伏が加勢している。また、行者達と越家の行動の相異なども記されており、文殊周辺に限られたものではあるが、数少ない入峯史料を補うものとなる。

「由緒明細録」の中の記述は「入峯扣」と関連させてみると、より具体的となる。嘉永三年の「公私用日記」七月八日の記事は、断片的ではあるが、この年、兩子寺で入峯の件を話合っている。おそらくは、嘉永六年の峯入りの件であり、遅くとも三年前には、その準備が始まっていたものと考えられる。

1

(表紙)

「文化十四丁丑年

六郷山入峯扣

文殊仙寺

二月廿三日

観明院代」

六郷山入峯発記

去四月、満山中寺院、兩子寺へ打寄、相談、相決候。

一、當山百姓、仙通り五ヶ所、清瀧境目迄、道作り候事。

二月十七日

一、当村役所江、道作人夫之儀頼遣し、人夫廿人、下垢離場より壽福院之下三角迄、小嶽境目迄葺かけ道作り候。

才領勝藏殿

二月十六日

一、村役人山之口忠太郎・弁指勝藏相伴ニ呼候。

一、廿三日早朝、小嶽境目迄、山内百姓村役人罷出候。案内中之坊之筈ニ候へ共、無住ニ付、當寺ヲ理性房差出候。先例、境目ニ山内ヲ御茶差上候へ共、大雨天ニ付、相止候。

石不動ニ勤有。十王同断。多聞天勤有。葦かけ石勤。當村ヲわらミのを拵へかけ候。東之門ヲ院主出迎、案内。本堂へ入場。行道、安樂品。⁽¹⁾夫ヲ行者堂、講堂、権現堂勤行相濟。當寺座敷ニ而わらちとき、洗足いたし候。御茶出候。御酒取肴二種。

當村ヲ食籠壹組、酒壹樽。淨満寺ヲ食籠壹組出候。其外、先達大聖寺への見舞所ニ有。

本膳一汁五菜。

護摩堂世尊偈。灵櫃自我偈

朝飯相濟、行者衆出立。東之門ヲ出。中之坊ニ勤有。夫ヲ下水り瀬・中垢離場・上垢離場相濟、仁王より本門に出。仙之不動、八大龍王ヲ塗込之地藏、竹之堂、御在所之岩ニ上り、峯通五ヶ所、紫竹之観音ヲ上り、馬之背ニ出候。越家ハ基所ノより(墓ノ誤リ)龜之甲通り、加持石ニ而五ヶ所、仙之加持有。

院主此所迄出候。境目迄、村役人遣候。

先達

大聖寺

越家

兩子寺

新客衆

成仏寺

清淨光寺

千燈

西之坊

胎藏寺

應曆寺

瑠璃光寺

兩子寺

自成坊

〃

庵実坊

當寺の伴僧

常明房遺候。

〆十壹人

其外、法螺吹之加勢山伏二人有。

一、わらち

十五足

當村の

一、ぞうり

十足

當村の

2

(表紙)

〔文政十二己丑年十月吉良日

當寺 由緒明細録

(異筆)
第二号

現住順道代

不動 但し岩に切付有之。仁聞の御作なり。御体ハしかと不相分候。

毘沙門 但し仁聞菩薩の作也。岩に切付有之也。

右下に、藁かけ石と申石あり。是は、仁聞當山御建立之時、此石に藁をかけて、ほしたまふ故、今茂、峯入の節、藁藁持參して右石にかける也。藁藁竹の内と申所より持參仕。この藁かけ石より、此村名を藁藁村といひ傳へ申ゆ。

仙の不動

石鉢佛作

右者、岩の頂上より九尺はかり下に、横(たて)を參れハ、岩の下に御姿あり。貳人とは行れず。壺人つゝ也。此岩頂上に、仁聞薩薩、行ひしたまひて、向岩へ飛し岩なり。その八間はかりあり。今茂、峯入度には、岩の頂上にて行ひ、仕飛のまなひをいたす也。故に、六郷峯入第一番の難所と申也。此岩屋に上る数多ゆへある也。この岩に登る時ハ、下上垢離(たて)、中垢離、下垢離三ヶ所にて、三度行水仕、岩に登る也。是より嶽の堂、御在所の岩屋行て、糸竹觀音へ下るなり。峯入行者ハ外ハ、巷人行ず難所至也。

3

(表紙)

「嘉永三戌年 文殊仙寺

公 私 日 記 帳

十二月廿九日迄 常照院代」

(七月)

八日、晴天峯入評議ニ付、兩子寺へ満山集会。眼病ニ付不參。式部卿差遣シ申候。

註(1) 内陣の周圍を繞経しながら廻ること。

(2) 法華懺法の経段の一つ。

(県史調査員大分県総務部総務課県史編さん班県史調査員)
大分市横瀬富士見が丘四一―一六